

低山はいかい倶楽部 報告 2018年4月

4月度 低山はいかい「醍醐エコロジー村見学と要倉山から和田峠へ」実施報告

実施日:4月29日(日)

参加者:(主幹事)国木田之彦以下23名

本文:

高尾駅北口に8時30分集合。ゴールデンウィーク二日目の高尾駅前には多くのハイカーでごったがえしていました。混雑するバスに乗車、今日の低山はいかいの起点、関場バス停に向かいます。バスの走る陣馬街道は、昔は案下道といい、案下峠といった和田峠を越える武蔵から甲斐への主要道で、江戸時代には甲州道中の裏街道として関場には口留番所が設置されていました。バスは案下川に沿って走り、進むにつれ周囲は鄙びた感じの長閑な山間の風景へと変わっていきました。バスを関場で降り、出発前の準備を行った後、陣馬街道を左に分け、醍醐川に沿って歩き始めます。醍醐川の清流は美しく、川沿いには時折オニグルミが若葉を出し、花穂をいっぱい垂れていました。途中にはオダマキ、ニリンソウやイチリンソウ、ツツジ等を、また古びた立派な社や文化年間の刻字のある古い石仏などを目にしつつ歩くこと約40分、最初の目的地醍醐エコロジー村に着きました。

醍醐エコロジー村では炭焼の見学をし、助役の川口さんから説明を受けました。ここでは、江戸時代に大奥で当時の「ブランド炭」として重宝された「案下炭」を再現しようと炭焼活動を開始、炭焼窯を大小10基以上を擁するという事で、黒炭を焼く大窯、白炭(備長炭)を焼くより小さな窯、竹炭を焼くドラム缶窯やそれぞれに使用される炭材について説明を受けました。炭材には基本的にはカシやナラの仲間が使われますが、炭の種類によって樹種も異なるということです。丁度、備長炭の窯出しをする所で、その様子も見学し、実際にそのやり方を体験することもできました。

醍醐エコロジー村を見学の後は、いよいよ要倉山への登りです。山腹にきられた葛籠折れの足場の悪い道とも言えない道を稜線に出るまで、川口さんの案内で登りました。稜線は林床植生に乏しいヒノキの植林帯で、急な登りが続きました。植林帯を抜け、コナラの大木の傍らを過ぎて最後の急坂を上り切ると標高562mの要倉山の山頂です。そこで一息入れ、山を下ると尾根筋の道となり眺望の開けた小ピークで昼食をとりました。このピークの南面は、かつては針葉樹の植林帯であったものが、伐採され広く眺望が開けていて、陣馬山から正面の堂所山を通り景信山に至る稜線、堂所山から北高尾山稜への尾根筋を望むことができました。伐採後地にはカエデやコナラなどの幼木が植えられていました。大きな広葉樹が数本伐採されずに残っていて、かつての広葉樹林を復元するための試みであろうと思われました。

昼食後は、道標のないアップ・ダウンの繰返しのきつい道が続きます。まず、本郷山分岐までの登り、そこから少し下った後に標高732mの本宮山に登り、本宮山から標高約650mまで下り、足場の悪い急斜面を登返すと今日のルート of 最高点、標高750mのメシモリ岩山に到着しました。途中、ツツドリの鳴き声を聞き、ニオイタチツボスミレ、イカリソウやナルコユリの花やツルリンドウの芽生え、花をつけたサワフタギやコバノガマズミ、特徴的な葉を持つハクウンボクなどを目にすることができました。また、標高700mを越えるとミズナラも眼にするようになり、標高による植生の変化も感ずることができました。メシモリ岩山からは醍醐林道に向けて下り、和田峠、そして舗装された昔の峠道を和田バス停へと歩きました。和田バス停着、15時35分。その前では大きな鯉幟が風に泳いでいました。参加者数23名と大所帯の低山はいかいとなりましたが、全員無事に下山、藤野駅前解散、近くの風里で振り返りを行いました。

(報告者)飯塚義則



イチリンソウとニリンソウに会う



醍醐エコロジー村で



炭の窯出しの様子



登山道に行く